

『学級崩壊を起こさないために』

学級としての機能が崩壊している学級を抱えている学校がどれほどあるのかはよくわからないが、どの学校においても、これまで学級崩壊がなかったから今後もないとはいえない。校長、教頭が察知してなくて、すでに崩壊寸前の学級となっている場合もある。

特に多くの学級数を抱える学校では、学級担任が学級で起きているよくないことを隠したがる傾向にあるため、周りが気づいた頃には、時すでに遅しといったことが度々ある。

そうなると担任は、すっかりと自信を喪失し、子どもへの対応も後手後手になっているから、子どもたちからの信頼も薄れ、やがて保護者からの苦情も多くなり、しまいには担任を変えろということになる。中には、担任をすぐさま変えることができないなら、学校を変えるという保護者まで出てくる。

なぜこのようなことになってしまうのか。担任教師が子どもたちを掌握できないからといってしまえばそれまでだが、学級が成り立たないまでに至るには様々な要因がある。

崩壊する学級には共通点がある。

- 教室内や靴箱が整理・整頓されていない。
- 学級内のルールが明確でない。
- 授業開始・終了、休み時間などの時刻が守られていない。
- しっかりと褒められたり叱られることがなく、見て見ぬふりや感情的に怒られる。
- 授業のねらいが明確に示されずに、授業にメリハリがない。
- 「はい」と返事、起立して発言、終わりに「です」などの発言のルールが徹底されていない。
- 課題を終えた子にやることが明示されていない。
- 事件・事故は校長・教頭にすぐ報告するとともに子どもが帰に着く前に家庭に伝えるということができていない。

この他にも多くのことがあるが、上記の共通点で特徴的なことは、学校生活におけるルール、約束ごと、規律をしっかりと守ることを子どもたちに指導しないと学級が崩れる傾向にあるということだ。規律がないところは弱肉強食となると言われている。力の強い者が弱い者を一方的に従えるようなことがあってはならない。学校は子どもたちに社会性や規範意識を身に付けさせる場所であり、集団で生活する上で必要なことを理解させる場所である。しっかりとよい悪いのけじめをつけなくてはならない。教師は常に子どもたちの言動に目を向け、機を逃さずに一貫した指導に努めることが大切である。また、この

ことは、学級の中だけでなく、学校全体としても一貫性を持たせ、どの学級でも同様な指導がなされるようにしなくてはならない。担任が変わった時、子どもたちが前の担任との違いに右往左往することがないような配慮が大切である。

「隠れたカリキュラム」ということが最近よく話題となっている。例えば、学校の日課表にある授業開始時刻や終了時刻など、教師が守るように指導していても、肝心の教師がルーズでその時刻を守っていないと、子どもたちは「日課表はそんなものか」ととらえてしまい、休み時間が終わり次の授業が始まる時刻になっても教室にもどってこないということなどが起こる。整理・整頓についても、教師の机の上がちらかっていたり、教室の掲示物が数ヶ月前のままといった状態では、子どもへの指導が生きるわけがない。また、教師の気分次第や一時的な感情による接し方が子どもに与える影響はけっしてよいものではなく、いずれ、子ども同士の関係にも悪影響が及ぶ。このように教師が無意識のうちに子どもに好ましくない手本を示していることがよくある。

学習する時のルールについても同様なことが言える。学習に必要な物の準備や発言・発表する時の約束、話を聞く時の座り方や姿勢のことなどをきちんと身に付けさせることによって、子どもたちは学習への気構えを持つことができるようになる。そして、その時間で何を学習するのか、何を考えるのかという学習のめあてを教師がしっかりと示すことが大切となる。計画的に授業の準備に努めている教師は、ひとつの授業を終えるたびに、子どもたちの理解の様子に着目し、反省と改善を図るため、徐々に授業が上手になっていく。しかし、教師が事前の準備をおろそかにし、その時その場の行き当たりばったりの授業を繰り返していると、子どもたちにとっては、気構えを持つこともなく、退屈で意欲のわかない時間でしかなくなる。やがて授業にのってこない受身の子どもたちが育ってしまう。

学級崩壊に至ってしまう担任は、子どもに与える悪影響について極めて無頓着なのである。中には学級の子どもたちに問題があるなど考える教師もいて、自分に原因があることに気付くことができない者もいる。また、ルールや規律で子どもたちを束縛するのはいかなものかと唱える教師もいて、子どもの自主性を大切にするという名目の下、結果的には、子どものやりたい放題好き放題にさせている。自由の尊重は確かに大切なことであるが、自由と表裏一体にある責任については、何一つ指導していないから、そのような担任の子どもたちは、自分本位で自己主張の強い集団となる。後にその学級集団を普通にするためには、これまたとんでもない労力を要する。そういう担任教師は、自分の主義主張を最優先し、学校の経営方針、学校の教育目標達成などといったことは頭の片隅にもない。学校組織の一員という自覚がないのである。（教師誰もがそうではないが・・・）

この他、若い教師、経験の少ない教師がつまり原因として、子ども理解が不十分ということが挙げられる。子どもは素直に言うことを聞いてくれると思いついて、担任となってから、思い描いていたことと現実との違いに驚嘆する。教育実習とは違うのである。若い教師は研修を積んで常に自分を高めようという意識を持つこと、同僚職員は若い教師をどう一人前の教師に育てていくかという意識を持つことが大事である。

今、学校に求められているのは、学級担任（一個人）任せにせず、全教職員が一致協力して学級崩壊など、子どもたちが不利益を被ることを防ぐための取組である。